

とく
徳

ほう
朋

大地に立つ

この しゅうぞん
弧野 秀存



この しゅうぞん
1948—現在
石川県生まれ。真宗大谷
派仁随寺衆徒。前大谷専
修学院長

かつてマルクスが、宗教というものは民衆のアヘンであり、^{しいた}虐げられた人々、苦しめられた人々のため息だと鋭く批判しました。アヘンはいけませんが、^{なぐさ}慰めということも大事なんです。生きることは次から次へといろいろな問題が起こってきますから、いつもいつも気を張って目一杯にいっぱいいっぱいになって生きるわけにはいきません。時にはふっと肩の力を抜いて^{なぐさ}慰められる、ひと時のほっこり感といいですか、ちょっとゆっくりすることも必要です。しかし、そのまま眠りほうけてしまったら、これは本当の宗教とはいえません。それこそマルクスが指摘したような、麻薬的な作用を及ぼすものに変質してしまいます。目先の事に追われてきりきり舞いをしている時に、ふっと、「そうだったなあ、親様（阿弥陀さま）のご恩のおかげでこうして日暮らしをさせてもらっているんだなあ」と肩の力を抜いて一息入れることが必要です。問題はそこからですよ。今までつま先立ちするように、前のめりのようなかたちで、とにかく前へ前へと前進しなければならない、向上しなければならない、良きものにならないと、必死になって生きてきた。「ねばならない、ねばならない」で自分を^{しった}叱咤^{げきれい}激励するだけであった者が、何かの拍子にふっと一息ついて、そこでまた元気を取り戻して、勇気を出して、そこからまた立ち上がっていくことが大事なのです。

やはりどんなに困難なことであっても、目の前に私の事実として、私の身の上で起こっている現実、事実は力を尽くして取り組み、解決に努めていかななくてはなりません。それを、自分の力を尽くすことを放棄してしまうのは逃避です。自分から逃げてしまっているわけです。(中略) 親鸞聖人が「南無阿弥陀仏」と、私どもにお念仏を相続してくださったのは、何も惰眠を食^{むさぼ}る安易な方法を教えるために九十年の生涯を尽くされたわけではないですよ。「大変でしょうね、切ない、辛い^{つら}いでしょうね。ちょっとゆっくりしませんか。そして身も心も落ち着いたら、やっぱり目を開いて、耳を澄^すまして、あなたの人生を、あなたがその人生の主人公になって歩んで行かれますか」と、こう声をかけておられるのが親鸞聖人の浄土真宗であるに違いないと思います。

その「ここ」という私どもの現実、生活の事実に目を開いて、そこで見るべきものを見て、聞くべきものを聞いて、この足元から立ち上がっていく。生活の真ただ中から立ち上がっていく。そういう力と意欲、願いの湧^わき起こってくるのが真宗の教えではないでしょうか。

(『往生浄土の道』)



辛く厳しい現実のただ中において、全ての現実を引き受けて立ち上がっていく意欲こそが浄土真宗の信心です。「(哲弘 拝)

この「徳^{とく}明^{めい}」は仏教^よを拠^より所としている方々の言葉に直^{じか}に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

